長沼まつり

幻想的な光が夜を彩る初秋の風物詩

大小のねぶたやねぷた約10基が繰り出し、夜の街を幻想的に照らし出す初秋の風物詩「長沼まつり」。参加団体の手作りねぶたを囲み、威勢よく跳びはねるハネトは圧巻。よさこい踊りや長沼音頭の踊り流しと子どもみこしが、まつりを一層盛り上げます。

長沼まつりの始まりは、昭和60年（1985）に遡ります。当時、1基のねぶたを譲り受けたのをきっかけに、町青年団体連絡協議会が結成され、子どもみこしと踊りの愛好団体など19団体が参加して第1回石背長沼まつりが開催。翌年には、青森ねぶたを視察研修し、試行錯誤のうえ、長沼産第一号ねぶた「雷神」が完成。また「スーパーマリオ」ねぶたも制作され大いに盛り上がりました。

第3回のまつりでは、それまで不確定だった開催日が毎年9月の第2土曜日に定められ、翌年は、ねぶた・ねぷたが6基、参加団体も23団体となり、まつりの規模も次第に大きくなっていきました。

平成元年（1989）には長沼まつり実行委員会が誕生し、名称も長沼まつりに変更。

平成19年（2007）には、手づくりのまつりを通して地域活性化と青少年の健全育成への取り組みをたたえる第18回みんゆう県民大賞ふるさと賞を受賞しました。

1基のねぶたと約千人の観衆で始まった長沼まつり。今では3万人を超える見物客でにぎわう大規模なイベントとして人気を博しています。

威勢よく跳びはねるハネトは圧巻

ねぷたやねぷたが街を幻想的に照らし出す

よさこい踊りや長沼音頭が祭りを盛り上げる

「らっせーらー、らっせーらー」の掛け声高らかに幻想的に輝くねぶたとハネトの供宴

◉長沼ねぶたの制作工程

1 骨組み

2 電気配線

3 紙貼り

4 書き割り

5 ロウ書き

6 色付け（彩色）

7 台上げ

1. 角材で約4m四方の土台を作り、針金で組んだ顔、手、足などのパーツを土台に固定し胴体部分をつなぎます。
2. 照明用の電気配線を行います。20Wから40Wの電球約120個が取り付けられます。
3. 奉書紙という青森和紙を、針金の1マスごとに形を合わせて切り抜き、白玉粉で貼っていきます。
4. 墨を使って書き割りを行っていきます。顔や手足、衿、帯、着物の柄などを書き分けていきます。
5. 明かりの通りを良くして色のにじみを防ぐため、模様や書き割り周辺などをロウ書きしていきます。
6. 染料を使って色付けしていきます。強弱を付けたい部分は薄めた染料でボカシを付けていきます。
7. 完成したねぶたの台上げを行います。台車内部の発電機3台をゴムチューブで固定して完成です。

平成15年「ほたる&水とみどりのふるさとまつり」として始まった
いわせ悠久まつり

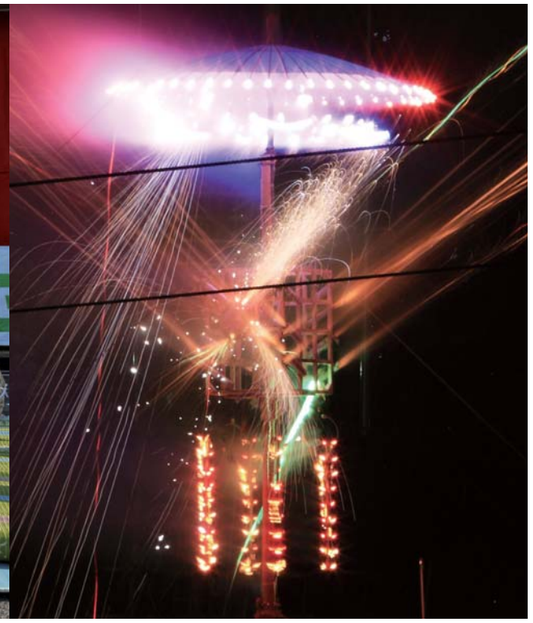
平成15年「ほたる&水とみどりのふるさとまつり」として始まった「いわせ悠久まつり」。平成21年に、現在の名称に変わり、開催時期も夏から秋に。平成25年（2013）のオープニングセレモニーでは、岩瀬商工会女性部が中心となって作成した折り鶴が披露されました。折り鶴で描かれた「結」の字には、昔ながらの結の精神で東日本大震災からの復旧・復興に取り組んでいくという想いが込められています。

岩瀬地域は、須賀川産ブランド米の生産推進と販売促進に取り組んでいる地域で、岩瀬清流米は減農薬・低化学肥料による環境に優しい特別栽培米として人気のブランドです。この地域で収穫された米を使った数々のイベントが繰り広げられるのも「いわせ悠久まつり」の特色です。

中でも祭りで好評を博しているのが岩瀬清流米早食い大会。子どもの部で350g、大人の部で1kgの岩瀬清流米を平らげるタイムレースに観衆はひときわ盛り上がりを見せます。また、米ロールケーキ早食い大会も人気の競技の一つです。その他、ちから自慢俵投げ大会や白江躍進太鼓、よさこい演舞、豊年踊りなど地区民あげての催しが目白押しです。

祭りのクライマックスには、東日本大震災からの復興を願い、いわせ復興花火が打ち上げられ、国内最大級のスターマインと唐傘行燈花火が岩瀬地域の夜空を鮮やかに彩ります。

踊りや合奏などのイベントが盛りだくさん



「唐傘行燈花火」は、閉じた傘が開くという日本で唯一の仕掛け花火です

平成23年8月28日開催のまつりでは、神奈川県座間市の皆さんと復興への願いを込めた大凧を上げました

健康づくり、福祉ケア、市民交流の複合施設。笑顔と笑顔がいきかう交流拠点

◉ZOOM IN いわせ悠久の里

「いわせ悠久の里」は自然環境を生かした健康づくり、福祉ケア、市民交流のための総合複合施設です。いわせグリーン球場や運動広場、トレーニングセンターのほか、いわせ保健センターやいわせ老人福祉センターでは温泉を利用した健康づくりが進められています。

1

2

1いわせ保健センター／健康相談室のほかに、軽トレーニング室、温水プール、温泉などを備えています。温泉は源泉掛け流し（源泉名：石背温泉）。内風呂・サウナ（ドライ、ミスト）・露天風呂（岩風呂・石風呂、ひのき風呂）があります。2いわせグリーン球場／本塁・センター間120m、両翼・本塁間100mの本格的な球場。スタンド席670人の収容。ナイター照明設備を完備。3いわせ運動公園／サッカー1面、ソフトボール2面 4いわせ地域トレーニングセンター／バスケット1面、バレーボール1面、バトミントン2面 5マレットゴルフ場／保健センター南側の遊歩道にある45ホールのマレットゴルフコース。この遊歩道は、ふくしまの遊歩道50選にも選ばれています。

3

4

5

松明あかし

420年以上の歴史を誇る火祭り

4

20年以上の歴史を誇る「松明あかし」。立ち並ぶ巨大松明から燃え盛る火柱が天を焦がす須賀川の勇壮な祭りです。毎年11月の第2土曜日に開催されるこの祭りの歴史は戦国時代に遡ります。

天正17年（1589）10月、伊達政宗は会津黒川城（現在の鶴ヶ城）の城主芦名氏を滅ぼし、その余勢をかって須賀川城攻撃を謀りました。それを知った二階堂家の家臣や領民たちが夜、手に手に松明をともし集結。決死の覚悟で須賀川城を守ることを決議し城主大乗院に進言。10月26日、釈迦堂川を挟んで合戦の火ぶたが切られます。しかし重臣の謀反により須賀川城は火炎に包まれ落城。家臣の大半は城と運命を共にし悲壮な最期を遂げました。「松明あかし」は、この戦で討ち死にした霊を弔うために始められたと伝えられています。

祭り当日は、若衆が長さ10メートル、重さ3トンもの大松明を担ぎ街中を練り歩き、その後に姫松明が続き、街は祭り一色となります。

二階堂神社で奉受された御神火も市内を一巡し、五老山へ。勇壮な松明太鼓のとどろきとともに、丘の上に立てられた大松明や林立する30数本の本松明に次々に点火され、祭りは最高潮に達します。

「松明あかし」は平成15年にふるさとイベント大賞優秀賞を受賞。市民自ら祭りを運営する文字通り市民総ぐるみのイベントです。

大松明や本松明に点火されると祭りは最高潮に達する

大松明は街中を練り歩き五老山へ

420余年前を偲びながら開催される晩秋の夜空を焦がす松明あかし

◉TOPICS 松明あかし

1989（平成元年）
「松明太鼓」初披露

松明あかしが400年の歴史を迎えるこの年、松明太鼓がふるさと創生事業の1つとして市民の前で初めて披露されました。それ以降、松明太鼓は松明あかしを盛り上げるなくてはならない存在となり、炎と音の供宴は、見物に訪れる人々の心を魅了しています。

2003（平成15年）
市民劇「松明あかし」上演

「すかがわ手作り市民劇」第2弾として「松明あかし」を上演。スタッフやキャストに中学生や高校生も加わり、若い世代が須賀川の伝統を生き生きと描きました。また、この年、松明あかしが第7回ふるさとイベント大賞優秀賞を受賞しました。

2009（平成21年）
本松明製作に一般も参加

この年、一般の方にも松明あかしに参加していただくため松明製作体験コーナーを設置しました。

2011（平成23年）
松明の材料が全国から

放射能汚染による安全・安心を考慮して、松明に使用するカヤや竹などの材料提供を全国に呼びかけ、23市町村から材料の提供を受け無事に歴史をつなぐことができました。松明あかしが結んだ縁を機に、全国各地と交流が生まれています。

2011（平成23年）
復旧・復興を願う「ろうそくあかし」

「ろうそくあかし」は東日本大震災により甚大な被害を受けた須賀川の復旧・復興を祈念するために生まれた新しい行事です。来場者が震災復興への思いを和紙に綴り、「七宝文様」「三光紋」などの日本の伝統文様を約2,000個の和紙キャンドルなどで表現します。

暮谷沢の碑

文安元年（1444）、二階堂為氏と須賀川を治めていた治部大輔が対立していた頃のことです。大輔の娘・三千代姫が為氏に嫁ぐことで和睦したかに見えた両氏でしたが対立は続き、為氏は妻三千代姫と離縁。三千代姫が父のもとへ戻る途上の暮谷沢の地で戦いが起こります。両氏が退散し、その場に残された三千代姫は「二夫にまみえず」という信念から、15歳の若さで自害、乳母や御付きも殉じました。「人問わば岩間の下のなみだ橋　流さでいとま　暮谷沢とは」。これは三千代姫がこの時に詠んだ辞世の句です。暮谷沢は栗谷沢へとその名を変え、三千代姫の霊を弔う暮谷沢の碑や三千代姫堂が静かに佇んでいます。

平成15年にふるさとイベント大賞を受賞した松明あかしは市民総ぐるみのイベント